地中海諸社会調査研究センター

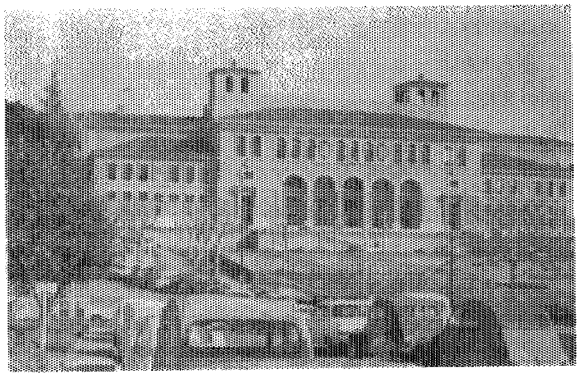
(エクスアンプロヴァンス)

Centre de Recherches et d' Etudes sur les Sociétés Méditerranéennes

I

エクスアンプロヴァンスは，人口7万人たらずの南フランスの古都で，近代工業もなく，温泉のある保養地，大学都市として知られている。その大学も，エクスには文学部と法経学部があるだけで，マルセイユにある理学部，医学部とともに一つの大学区 Université d' Aix-Marseille を作っている。この地方都市に，ここでとりあげる地中海諸社会調査研究センター（以下CRESMと略称で呼ぶ）をはじめ，これとまぎらわしい名前をもつ地中海諸社会研究センター(Centre d' Etude des Sociétés Méditerranéennes, 文学部付属, 17～18世紀のギリシャ農村社会の歴史地理・社会学的研究にあたる), 海外諸国歴史研究所 (Institut d' Histoire des Pays d' Outre-Mer), インド洋諸国研究センター (Institut d' Etudes des Pays de l' Océan Indien) などの大学付属研究所，独立の研究機関である応用人文科学アフリカセンター (Centre Africain des Sciences Humaines Appliquées), 旧植民地の行政文書を所蔵する海外文書館 (Archives d' Outre-Mer) などがあるのは，けっして偶然ではない。

それは第1に，エクスの立地による地方的特色である。大西洋にむかって開いたボルドーに，海外研究所 (Institut d' Outre-Mer), 黒アフリカ研究センター (Centre d' Etude d' Afrique Noire) があるのと同様に，地中海最大の港マルセイユの後背地であるエクスに，海外諸国とくに地中海諸国を対象とする数多くの研究・教育機関があるのは当然であろう。学術研究の面でも中央集権の著しいフランスではあるが，近年の大学生の急増にともなって，地方大学を充実する傾向もそれにあずかっているといえる。しかし，これらの研究機関の設立が比較的近年であり，海外諸国という場合，単なる諸外国ではなく旧仏領植民地諸国を指すことを考え合わせると，もう一つの事実がうかびあがってくる。それは植民地諸国の独立にともなう研究体制の変化であり，フランスの勢力圏を拡大再編成する政治経済の動きに照応して，対象地域が



旧植民地から低開発国一般にひろげられ，また政策課題が植民地行政から開発と経済協力にかわるのに照応して，行政学，地理学，民族誌学などの「植民地的」な特定の専門科学から，多専門科学的な総合研究に研究領域がひろげられたということである。エクスにある研究施設で特徴的なのは，旧植民地から引き揚げた大学人と行政官僚が運営の中心になっていることであり，こうした研究体制の再編成の流れのなかで，いわば象徴的な意味をもっている。

なかでもマグレブ研究の中心として知られるようになったCRESMは，研究組織の点でも，活動の点でも注目に値する研究機関である。わたくしは1968年3月，7月，70年2月の前後3回にわたって訪問し，研究所の重鎮であるル・トゥルノー (Le Tourneau) 教授をはじめ数人の研究者・司書と面談し，また特色のあるカードを備えた図書館を利用する機会をえた。

II

CRESMの前身は，1959年創立の北アフリカ研究センター (Centre d' Etudes nord-africaines) であり，1964年に地中海アフリカ調査センター(Centre de Recherche sur l' Afrique Méditerranéenne, 略称 CRAM) として改組され，さらに69年に，現在の CRESM と改称された。当初から社会科学・人文科学の分野での多専門科学

的総合研究，共同研究をめざしていたが，対象地域は名前が示すとおり，旧仏領北アフリカ（モロッコ，アルジェリア，チュニジア）だけであったのが，改称とともにリビアを含むマグレブ地方に拡大され，ついでトルコ，ギリシャ，スペインなど地中海全域をも含めることになった。CRAM となった当初は，近代・現代部門と考古学部門に分かれ，考古学部門はアルジェ支部をもっていたが，1968年に考古学部門が分離され，現在のCRESMには部門区分はない。

設立当初のスタッフは，エクス大学の法経学部，文学部の教授が中心であり，行政法のフロリー (M. Flory)，北アフリカ地理学のイスナール (H. Isnard)，植民史のミエージュ (J. Miège) などのマグレブ専門家が参加していたが，現在では CRESM 固有のスタッフが増加している。

中心メンバーは，前所長である北アフリカ史のル・トゥルノー，トルコ史のマントラン (R. Mantran)，行政法のドゥバッシュ (Ch. Debbasch)，社会学のアダム (A. Adam)，デュシャック (R. Duchac) など（以上大学教授兼任），専属のスタッフとして，エティエンヌ (B. Etienne)，スリオー (Ch. Souriau) 女史他がいる。専属スタッフの数は研究員14名，図書館司書5名，協力者3名，事務員6名であるから，フランスの研究機関として，規模はさほど大きくないが，上に名前をあげた人々は，マグレブ専門家としてすでにすぐれた著作を発表しており，いずれも長期間の現地生活の経験をもっている。たとえばル・トゥルノー教授は，フェズに11年，チュニスに3年，アルジェに10年も過ごしているし，アダム教授はモロッコ生活25年の経験がある。フランスの大学人としては，フランスの大学で教育をうけたあと，植民地のリセの教師や大学の助手の職につき，その間の調査をもとに学位論文を書きあげて，本国の大学に就職する機会を待つというのは，ごくありふれた経歴であるが，こうした事情は現在でも同様であり，文化協定や技術協定にもとづく協力員として多くの若いフランス人研究者がマグレブの土を踏む。CRESMの若いスタッフも技術協力員の経験があるが，マグレブに生まれ，父祖3代が生きた土地への愛着が動機でマグレブ研究に従事するものも少なくない。また3名の協力者というのは，いずれもマグレブ出身の留学生であり，学位論文を準備するかたわら，アラブ語文献の要約や翻訳のアルバイトをしているわけである。

空路1時間，海路20時間で地中海の対岸に渡ることができ，5万円もあれば2週間位の調査旅行ができるという有利な地理的条件だけでなく，フランス（とくに南フランス）とマグレブとのふかい歴史的関係が，CRESMの研究者層を厚くし，研究の水準を高めているということができるだろう。

共同研究を組織する際には，上記のエクス大学の教授たちやそのもとでマグレブ研究に従事する若い研究者を動員しているし，プルム (W. Plum) などのドイツのマグレブ研究者と合同シンポジウムを開催したり（1967年11月），ヨーロッパとマグレブの研究者を集めた国際学会を主催したこともある（1968年11月）。しかし CRESM で注目すべきことは，次に述べるように恒常的な文献活動の面で他の機関と協力体制をくんでいることであろう。

III

CRESMでは，学生の教育は行なわず，研究活動としては研究者の個人研究が主であるが，1966年から次のような年間の共通テーマをもうけるようになった。

1966年　北アフリカにおける国家の継承
1967年　マグレブにおける文化変容と文化協力
1968年　マグレブにおける権力と行政（マグレブにおけるエリートの研究）
1969年　都市化
1970年　政治エリートの形成

その結果は末尾のリストにかかげるとおりに公刊されているが，CRESM の活動でより注目に値するのは，Annuaire de l'Afrique du Nord の定期的発行と文献活動であり，CRESMの組織は，そのために組みたてられているといえる。そこではじめに Annuaire の内容を大づかみに述べておくことにしよう。

Annuaireは文字どおり，年刊であり，1962年版以後，1968年版まで出ている。

対象地域はマグレブ4カ国で，CRESMの活動領域を，地中海全体に広げても当分の間は変更する予定はないとのことである。リビアの取扱いに若干の変化はあるが，構成はほとんど各年とも同じであり，研究論文，年報，日誌，資料，科学年報，文献目録の順で，最後に索引と目次がある。

研究論文は，外部からの寄稿を含む北アフリカ全般についての論文欄であり，66年版から共通テーマにあわせて特集がくまれている。年報の項では，政治，外交，社会・文化，経済に分けて各国別に年間の回顧と主要トピックスの分析をしており，執筆者は研究者たちである。日

誌は，主要なできごとについてはかなり詳細な説明があり，分量も200ページ近くある。執筆者は司書 (documentaliste) であるが無署名である。資料の欄は，主要法令，国際協定，内閣改造，演説などを収録するものであり，原典と省略個所などが明記されている。科学年報というのは，研究機関紹介，研究史，研究ノート，資料紹介などであり，利用価値が高い。書評は年平均35点ほど取りあげているが，単なる内容紹介から本格的批評にいたるまでいろいろであり，選択の基準もはっきりしていないようである。文献目録は，単行本だけでなく，雑誌，新聞記事についてもマグレブにかんする記事タイトルをかなり網羅的にカバーしているが，アラブ語の文献についても，ローマ字化し訳をつけて収録してある。

このような年鑑を編集するためには，情報収集網の整備と情報処理の組織化，なかでもいわゆる documentation 活動が十分に行なわれなければならないことはいうまでもない。

CRESMの付属図書館は，西欧語文献が，単行書7000点，雑誌350種，新聞20種であり，アラブ語文献が，単行書・非継続の雑誌3200点，雑誌9種，新聞14種である。CRESMの歴史が浅いため所蔵点数は，さほど多くないが，地域を限定し，研究者と論文執筆中の学生を対象とする専門図書館としてはかなり充実しているといってよい。アラブ語文献はよく整理されており，通常の大図書館（たとえばアルジェ大学のもの）にくらべると使いやすいが，現在のところ教授が講義に用いたり学生に指示したりしないので（あるいはできないのでと整理にあたるスリオー女史は皮肉っぽい微笑をもらした），利用度は低いが将来に備えて収集に力をそそいでいる。

このような所蔵文献と新聞雑誌から，Annuaire に記載されないものをも含めた膨大な量の情報を整理加工するわけであるが，それに従事する司書と事務局員の人数は，すでに述べたようにそれほど多くないし，機械化が不可能な単純作業であり，しかも高度の能力を必要とするものであるために作業能率を高めることもできない。これは文献活動を行なう研究機関が必ず直面する難問題であるが CRESM では外部の機関と協力体制を作ることによって対処している。すなわち新聞，雑誌記事の索引は，パリの国立政治科学院やアルジェの政治学研究所などからカードとなって送られてくるし，日誌は在外公館が作成したものがとどけられる。同様の作業を行なっているパリの文献センター (Documentation française) と国立政治科学院付属の国際関係研究センターが合同で発行する隔月刊誌 *Maghreb* の記事も CRESM の作業の基礎に用いられる。これらのものを，CRESMが適宜みずからの作業と対照しつつ，つぎつぎとカード化していくわけである。

もっとも量が多いのは，クロノロジカルデータであり，カードの年間増は1万5000枚にのぼるが，それ以外に，文献カード（CRESM が所蔵しないものも含む），学位論文カード（著者名，論文表題，学校・指導教官名），研究機関カード（機関名，住所，責任者，目的，創立，研究調査課題，出版物），マグレブ研究者カード（氏名，住所，所属，学位，専門，対象分野・地域，著書），マグレブの主要人物の経歴カードが作られている。情報の精粗だけでなく，カードの記入方式も同種のものでも必ずしも一致しないし，人手がないために定期的点検・増補を組織的には行なっていないが，これらのカードは，年鑑編集の素材として使われるだけでなく，そのまま閲覧に供される。つまり研究者が個人個人でしている研究のための基礎作業を共同で行ない，研究の成果だけでなく素材をも共有する試みであり，いわば共同研究のシステム化である。ここでは新聞記事の切り貼り（クリッピングとファイリング）をしていないし，マイクロフィルムへの複写も行なわれていないから，数年もしないうちに所蔵スペースや閲覧のための整理の問題が生ずることは明らかであるが，年鑑編集のために限っていえば，直接に記事の要約カードを作るほうが経済的であることもたしかである。しかし，CRESMの規模でそれが経済的といえるのは，あくまでも上に述べた外部との協力体制を前提にしてのことであることを忘れてはならない。

ところで CRESM と外部との協力体制について，司書ミッシェル (V. Michel) 嬢が，その技術的前提として分類方式のことをあげていたことが印象に残っている。CRESMの文献は，独自の分類方式によって処理されるが，それは INSEE 方式（国立統計経済研究所）に準拠したものであり，他の協力機関でも INSEE 方式（または，その修正）を用いているとのことである。これは，単に分類方式の統一だけでなく，分類方式自体の選択が重要であるということである。たとえば従来の国際十進分類法を採用したならば，CRESMのように低開発諸国中心の情報整理には多くの混乱が避けられないに相違ない。他の機関との協力体制を組織することは，けっして容易なことではないが，将来にそなえて，そのための技術的な前提条件を少しずつ作りあげていくことが大切であろう。

IV

これまでに，エクスアンプロヴァンスと CRESM における研究体制について述べてきたが，それをフランスのマグレブ研究全体のなかで位置づけてみたい。

フランスのマグレブ研究は，他の非ヨーロッパ世界を対象とする研究と同様に，旅行記や軍人，行政官，伝道師による実地調査報告にはじまって，行政学，民族誌学，地理学のような技術的な，あるいは記述的な学問になり（植民地行政に直接役立たないまでも，植民地体制に無批判であるという意味で「植民地的」と述べた），やがて人文・社会科学の発展にともなって専門科学別研究に分化するようになった。なかでも，歴史学と人文地理学（フランス的伝統の歴史と結合した）にみるべき成果が生み出されたが，政治学，経済学の分野は不毛であった。それは，マグレブの政治と経済をとりあげても，マグレブの現実に対して既存の枠組を機械的に適用するのみで，現実に照らして枠組そのものの再検討をするという手続きを欠いたためであり，その結果，単なる記述（しかもきわめて恣意的な）に終始したのである。こうした社会科学の傾向の対極にあるのが，いわゆる東洋学者たちの仕事であり，見聞の描写から出発しながら，マグレブ人との対話（アラブ語文献の翻訳・注釈）を通じて，マグレブ社会の内在的理解にむかった。しかしその方法的欠陥（というよりも無方法）から，非歴史的末稍主義におちいり，その伝統は比較歴史学，社会学の訓練をうけた人々によって批判的に継承されてよみがえる。

以上は，マグレブ研究史をあえて単純化して整理したものであるが，この研究史の前段階（1930年以前）には，たとえばアルジェ学派と呼ばれた植民地を本拠とするグループが研究の主流にあり，両大戦間の植民地体制の再編成期以後，フランス本国に中心が移動する。1950年代には，デポワ (J. Despois)，ドレッシュ (J. Drssch) を中心とする地理学科，ジュリアン (Ch. A.Julien) がいた歴史学教室（いずれもソルボンヌ）がその中心であったが，現在では個人的結びつきは別として堅固な研究グループを作っていないし，東洋学の伝統から社会学的マグレブ研究の最高水準に達したベルク (J. Berque) も，マグレブ出身の学生をひきつけているが，フランスの学界では孤立している。地方にもすぐれた研究者はいるが，パリ以上に分散している。

こうして現在では研究体制の面からみるともっとも組織化が進んでいるのは，植民地独立の衝撃をうけて，地域研究として新出発した政治学・経済学の流れであり，CRESMがその典型であるということになる。

CRESMがめざしているようないわゆる地域研究は，フランスでは政治諸科学の一部門とみなされ，制度上，法学部や文学部のような伝統的学部ではなく，学部から独立した政治学科 (Institut) に所属している。ここで，CRESMの沿革を補足すると，その前身である北アフリカ研究センターは，国立政治科学院とむすびついて，エクス大学の政治学科に付設されたが，国立科学調査センター（CNRS）の予算をうけて研究機関 CRAM として独立し，CNRSの補助金を再申請する段階で，CRESMになったのである。CRESMの発展の歴史とフランスの地中海政策の展開との間に関連があることは，おそらく疑いないが，研究体制の発達に焦点をあわせると，次のような経験法則がフランスにも見いだされるといえる。すなわち，新しい研究体制は，古めかしい学部制・講座制で固まった大学の枠内で作ることができず，新しいものを作ろうとすれば，予算を獲得するために政策的方向と一致する研究目的をかかげた研究体制ができあがるということである。

しかしそれが研究者の側からいえば，単に時流に迎合したことになるか，あるいはそのかげにかくれた時代的要請を先取りすることになるかは，研究の内容いかんにかかわっている。その際，研究体制の組織化にともなう研究内容の技術学的空洞化の危険を避けるためには，これまでのマグレブ研究の成果を批判的に摂取して，エクスに強く残っている植民地学派の伝統と植民地時代の社会科学の欠陥が超克されなければならない。そのためにも，CRESMがすでに行なっている外部との組織的な交流の一層の推進が必要であり，歴史学のアジュロン(Ch. R. Ageron)，人文地理学のプルナン (A. Prenant)，社会学のシャルネ (J. P. Charnay) など人文科学におけるマグレブ研究の現世代を代表するフランス人研究者だけでなく，マグレブに育ちつつあるマグレブ人研究者との問題交換が大きい意味をもつであろう。

（本稿は，海派報告「フランスにおけるマグレブ研究」の一部である。）

CREMの出版物一覧

Annuaire de l'Afrique du Nord, 1962 (939p.), 1963 (1199p.), 1964 (968p.), 1965 (1067p.), 1966 (1108p.), 1967 (1327p.), 1968 (1172p.)

Adam, A., *Casablanca Essai sur la transformation de la société marocaine au contact de l'Occident*,

1968, 2vol., 895p.

Cauneille, A., *Les Chaanba (Leur nomadisme). Evolution de la Tribu durant l'administration française*, 1968, 320p.

Couleau, J., *La Paysannerie marocaine*, 1968, 296p.

Debbasch, Ch., *et al.*, *Mutaions culturelles et coopération au Maghreb*, 1969, 264p.

Etienne, B., *Les Problèmes juridiques des minorités européennes au Maghreb*, 1968, 416p.

Flory, M., *et al.*, *La Succession d'Etat en Afrique du Nord*, 1968, 106p.

Miège, J., *Documents d'histoire économique et sociale marocaine au XIX siècle*, 1969, 359p.

Munier, B., *La Baque nationale pour le développement économique et l'industrialisation du Maroc*, 1967, 228p.

Souriau-Hoebrechts, C., *La Presse maghrebine. Lybie, Tunisie, Algérie, Maroc*, 1969, 369p.

発行所はいずれも Paris, C. N. R. S. である。

CRAM 時代の考古学部門の出版物は省略した。

（調査研究部　宮治一雄）

アジアを見る眼シリーズ（B6変型判・並装ビニールカバー付）

低開発国開発理論の系譜

坂本二郎著

190頁／¥350

躍動する低開発国諸国が，政治的，経済的発言の場で第三勢力としての地歩を着々と築き上げてきた今日，これら諸国の現状分析と状況の把握の理論的ベースは，いわゆる「南北問題」へと変転した。しかし著者は，このような情勢を踏まえたうえであえて原点に立ち返り，ハーシュマン，ミルダール，ヌルクセ，ロストー，ティンバーゲン以下内外の80人に及ぶ経済学者の文，献を取り上げ，戦後の低開発国開発理論の再検討をし，理論的究明を試みる。
本書は，「南北問題」をより鮮明に浮き彫りにする意味でも，重要な布石となる好著である。

ガーナ経済の歩み

細見真也著

190頁/¥300

奴隷海岸にそそり立つ古い大きな城塞には，奴隷商人が奴隷を品定めした小さなのぞき窓のある広い部屋や，船積みのために奴隷たちが投げ込まれた古井戸がある。ここで流された大量の血と数知れぬ奴隷たちの呻吟は，彼らの犠牲の上に築かれた今日のヨーロッパ，アメリカの繁栄と黒々としたその歴史への告発である。筆者は現地に赴いてこれら阿鼻叫喚の傷痕を実見しその衝撃と痛憤の矛先をむしろ冷静に経済的側面からの「暗黒大陸」解明に向けられる。本書は，躍動する今日のアフリカに散在するさまざまの問題を解明する意味でも基礎的資料となる。

アジア経済研究所刊行　　アジア経済出版会発売